

保健医療・福祉関係養成過程の学生における 職に対するイメージの比較研究

松 木 悠紀雄

(看護学科)

A Study on Professional Imagery Held by the Students of Training Schools for
the Medical and Welfare Profession

Yukio MATSUKI

Faculty of Nursing

Abstract A questionnaire survey on professional Imagery by the semantic differential method was executed, using the class in Training Schools for nurse, nutritionist, and welfare Profession. Respondents were 675 students from 4 colleges, 3 were in Japan and 1 was of nursing college in US.

Questionnaire required the level mark between pair words of image in opposition. And level marks in questionnaire were transformed to numerical scores, from -3 to 3. 30 paired items were analyzed on average, variance, correlation and factor analysis.

US nursing students showed a special tendency in average score, that might be connected with the social status of nursing profession. In general, nursing students would have more obvious picture of profession than others, and nutritional students showed most monotonous picture. Many characteristics by school on professional image would bring meaningful suggestions to training education. Particularly intensity of 'interesting' and 'valuable' image shown highly and uniformly in score of US nursing students, must be a precious guideline for our education.

はじめに

わが国では保健医療や福祉領域における認定資格取得のためのさまざまな養成学校があり、それらの資格も国家認定資格から学会の認定する資格、業種団体の認定する資格など多岐にわたっている^{1),2)}。医療関係においては将来的な看護婦不足が長く指摘され、医療技術の高度化に対応するために看護系の大学や学部、短期大学の新・増設が続いてきた。福祉関係において

も高齢化社会への対応と介護保険法の施行を控えて、各種の福祉関係有資格者の養成を急務としている。このように、社会的なニーズにもとづく職業人の確保のために養成課程は存在するもので、資格はその技能の一定水準を確保するための手だてである。したがって養成課程学生は、関係資格を取得し、関係職に就職するということが養成教育の有効性の指標となるはずである。

わが国の景気後退、企業のリストラクチュアリング、失業率の上昇などを目の当たりにして、学生は有資格への進学傾向を強めつつあることはかねてから指摘されている。しかし実際に各種資格のための養成学校へ入学して、臨地実習等で将来の職業環境を知って就職へのためらいを持ち、あるいは授業に興味がわかず、ついていけずに脱落したり、資格だけ取得してその関係職への就職を回避する学生も少なくない。また就職後の定着率も職種によりさまざまであると言われるが、それを実際に調査した例は多いとは言えず、たとえば看護職では就業年数が短期間で再就職を繰り返す、などの調査報告がある³⁾。

著者は、いくつかの医療・福祉関係の養成課程において学生の教育に携わってきたが、その後の就職に対して学生側の姿勢・意気込みがそれぞれ異なることから、各養成課程学生が将来の就職に対してどう考えるかその基本的な姿勢の相違を比較したいと考えた。しかし社会的なニーズや受け入れ態勢の違いがその姿勢に影響することは当然のことであるので、そのニーズそのものの測定や、就職後の職務上の満足度なども調査すべきであると考えながら、後者について言及した成書なども既にあり、その高揚のための条件が特徴づけられている^{4),5)}。また卒後学生の職への適応について調査した養成学校の報告などもある⁶⁾。本報告は職と養成教育に関する総合的把握のための一環とすべく、養成課程学生のとときから抱く職イメージの内容を分析することによって、基本的な姿勢の相違が一部比較できるのではないかと感じたことが、本研究にとりかかる動機となっている。著者の講義の傍ら、各養成課程学生に対してそれらの調査を行った結果をまとめたものが本報告である。ただし講義という機会を利用しての調査であるため、社会変化の激変する昨今ではあるが、全体にわたる調査時期が数年単位の長期にわたらざるをえなかったこと、また元来看護職のイメージ分析を主体とした研究であったことを予めお断りしておきたい。

対象と方法

調査対象とした養成校は次のとおりである。看護婦養成課程の学生については、某県におけるA短期大学の看護関係学科の全学生、栄養士養成課程学生については同県内のB短期大学の関係養成課程の全学生、社会福祉養成課程学生については、同県内のC大学の関係学科3年生の某選択講義出席学生である。ただし全学生と記したのも、調査した講義時間が必修・選択の入り交じった時間帯であるので、すべて均一の標本とはいえない。看護婦養成課程学生につ

いては、米国某州の Community College の協力をうることが後年に可能となったため、それも調査対象に加えることとした。ただしこれについては、講義に関係していなかったことから講義時間の一部を使って調査できず、関係教員に依頼して講義時間に調査票を配布し、その後提出してもらうという調査法となり、わが国の場合とやや状況が異なった。またわが国の対象学生はほとんど女子であったため、女子学生のみ限定して調査したが、米国では男女混合となっている。しかし本稿では便宜的に以下、看護婦養成課程学生と呼ぶ。

調査実施の期間は、前述のように講義担当クラスが年単位となるため、1992年から1997年までの6年間にわたっている。

職に対するイメージ調査は、従来から用いられることの多い Semantic Differential 法⁷⁾によることとした。この手法は元来意味の測定に提唱されたものであるが、近年いわゆるイメージの測定などに広範に利用されている^{8), 9), 10)}。同法に基づく調査票を作成し、講義参加者に対してそれを配布し、調査内容を説明して協力依頼を行った後、わが国においては同時間内に全員に記入させて回収したものであり、米国では前述のように後日回収した。

調査内容については、職のイメージに関して対語を30に限定することとし、多数の候補の中から表1に示した対語のみを採用した。調査票ではこの順序で列挙してあり、それぞれの対語

表1 調査に用いた対語項目

質問	対 語			
Q1	面白い	interesting	つまらない	uninteresting
Q2	画期的な	creative	平凡な	ordinary
Q3	安定した	stable	流動的な	fluid
Q4	楽な	comfortable	きつい	demanding
Q5	好きな	favorable	嫌いな	unfavorable
Q6	日本的	local	外国的	international
Q7	営業的	businesslike	献身的	voluntaristic
Q8	高級な	high-class	大衆的な	common
Q9	価値のある	valuable	無益な	worthless
Q10	理性的な	rational	感情的な	emotional
Q11	古めかしい	backwards	近代的	modern
Q12	明るい	bright	暗い	dark
Q13	強要的な	forced	自由な	free
Q14	暖かい	hot	冷たい	cold
Q15	簡単な	simple	面倒な	troublesome
Q16	慎重な	careful	気軽な	foolish
Q17	機敏な	active	のんびりした	late
Q18	勤勉な	diligent	怠惰な	lazy
Q19	進歩的	progressive	保守的	conservative
Q20	親切な	kind	愛想の悪い	unkind
Q21	実直な	serious	表面的な	superficial
Q22	知的労働の	intellectual	肉体労働の	physical
Q23	きれいな	clean	きたない	dirty
Q24	豊かな	rich	貧しい	poor
Q25	力強い	powerful	気弱な	weak
Q26	スマートな	nice-looking	ださい	unattractive
Q27	危険な	dangerous	安全な	safe
Q28	給料の高い	high-salaried	給料の安い	low-salaried
Q29	忙しい	busy	暇の多い	leisurely
Q30	自立した	independent	従属的な	dependant

は、「どちらともいえない(neither)」を中心として両側に配し、片側の語に対してそれぞれ「非常に(strongly)・かなり(moderately)・やや(slightly)」という程度区分で3分し、等距離で調査票に図示したものに、感じる程度を数直線上の点としてマークさせたものである。このほか、年齢や性別、専攻などの項目を記入させている。

これらの調査結果の解析に関しては、いろいろな手法をとることができるが、本報告では次のような方法を用いた。各対語に対する反応の程度は、調査票で等距離間隔の図示法を用いたため7段階でスコア化することが可能であると考えた。すなわち「どちらともいえない」のマークを0として、対語の程度区分のマークは1ずつ増減して-3から3までの値を付与する(以下スコアと呼ぶ)こととした。対語のいずれの側を正符号の側とするかは便宜的なものであるから調査票での羅列順序に関わらず、全数における平均値が正となる側を正として、解析時に配置し直した。また対語の順序についても、視覚的な便宜のために以下の図表では、全数でのスコア平均値の絶対値が大きい順に並べ直して示すことにする。

解析方法は、まず養成課程の職種別にそのスコアの平均値をとることで課程別集団の位置的な比較を、さらに分散をとって集団内のばらつきを比較した。職種別のスコア平均の差についてはt検定を用いて有意性を検討した。t統計量の算出についてはLeveneの分散斉一性の検定結果に応じてその算出方法を考慮している。さらに職種別のスコアの変動については、判別分析により差を生じる因子を抽出・検討することも考えられたが、ここでは養成課程別のそれぞれの集団について因子分析を行い、その代表的な変動の因子負荷量について比較することで、個別の対語の検討では測定できない30変数の変動について比較・検討することとした。なお計算はすべてパソコン用SPSSソフトウェアを用いた。

結 果

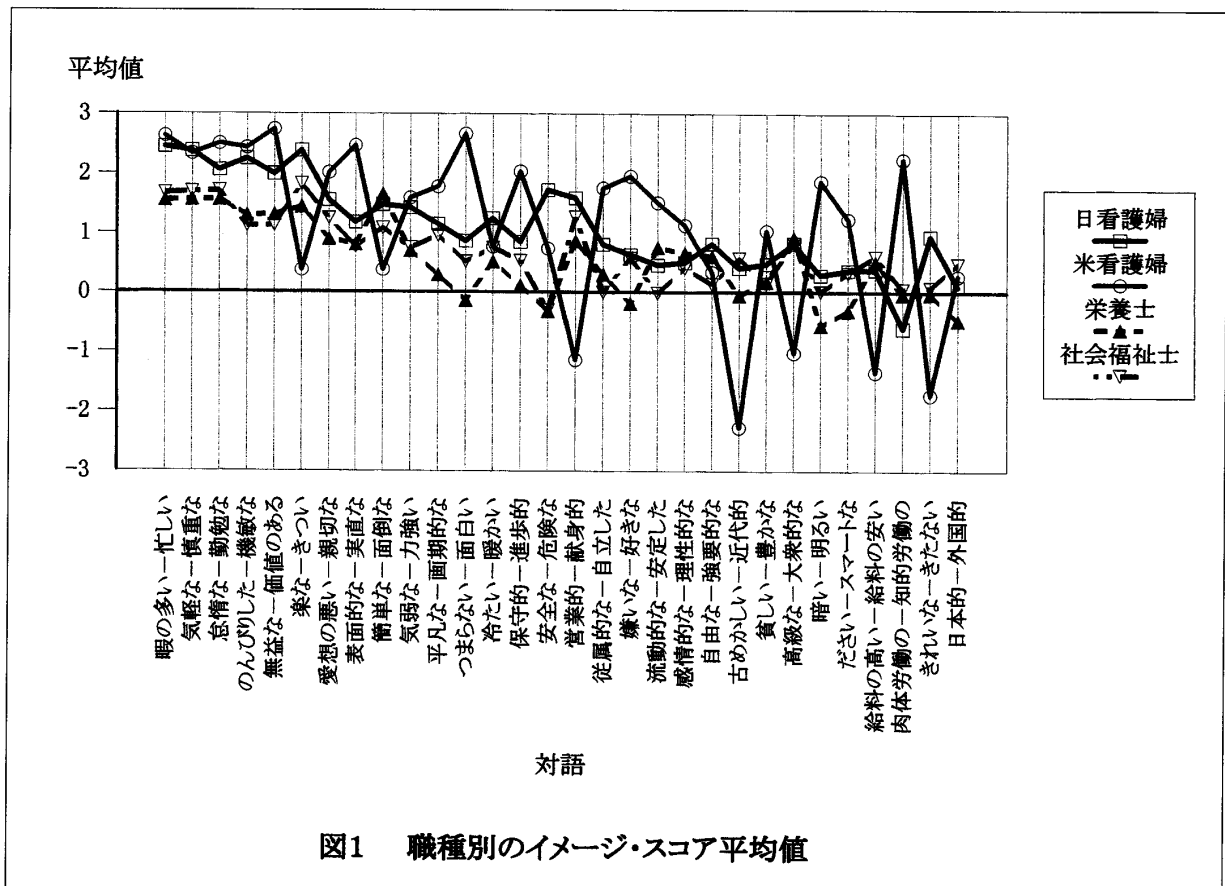
調査回答のうち有効回収数は、わが国では看護婦養成課程学生312(以下、日看護婦学生と呼ぶ)、栄養士養成課程学生151(以下、栄養士学生と呼ぶ)、社会福祉士養成課程学生73(以下、社会福祉士学生と呼ぶ)、米国の看護婦養成課程学生139(以下、米看護婦学生と呼ぶ)、合計675であった。

集団の年齢構成については表2のとおりである。わが国の養成課程学生はほぼ21歳までがほとんどであるが、その年齢層は米国ではわずかで、20代後半以降が主である。なお米看護婦学生の性別は男子27名、女子112名であった。

集団別のスコア平均値については、前述のように全数での平均をもとに、対語に関して正の向きとなるように、また大きさに関して降順に並べ変えて示してある。養成課程別4学年集団のスコア平均値を示したのが図1である。対語軸に並べた語は、負符号の向きが下側の語、正符号の向きが上側の語で示してあり、これは以下の図でも同様である。図に示されるとおり、

表2 各学生の年齢構成

養成課程 年齢階級	日看護婦	米看護婦	栄養士	社会福祉士
18-19歳	186	2	92	0
20-21歳	114	12	57	66
22-23歳	7	18	0	5
24-25歳	3	20	0	0
26-27歳	0	18	0	0
28歳以上	1	64	0	1
年齢不詳	1	5	2	1
合計	312	139	151	73



わが国の学生は、米看護婦学生のスコアの大きさに比して3養成課程とも類似する傾向を示した。米看護婦学生で、わが国の3学生集団と比べて特徴的な平均値の相違がある項目を示すと、符号の逆転しているイメージ語として「営業的」「古めかしい」「知的労働の」「きれいな」「給料の高い」「高級な」などがあり、際だって高く示されたイメージ語では「面白い」「進歩的」「好きな」「自立した」「安定した」「明るい」「実直な」などがある。逆に低く示されたイ

イメージ語に「きつい」「力強い」などがある。日看護婦学生で特に高く示されたのは「危険な」「きつい」「きたない」といういわゆる3Kといわれるイメージ語であった。

わが国の3学生集団の中だけで比べると、日看護学生に比し、栄養士学生・社会福祉士学生はスコア平均が0に近いところに位置している。看護婦学生とその他の学生との比較という視点から図をみると、「暇の多い—忙しい」から「無益な—価値のある」までの左から5対語までが看護婦学生で値が大きく、その他の2学生集団で値が小さいことが示されている。

集団別のスコア分散は全体的に1～2前後の値にあるが、際だって高く示される項目がある(図2)。それらを列挙すると、栄養士学生・米看護婦学生における「日本的(国内的)—外国

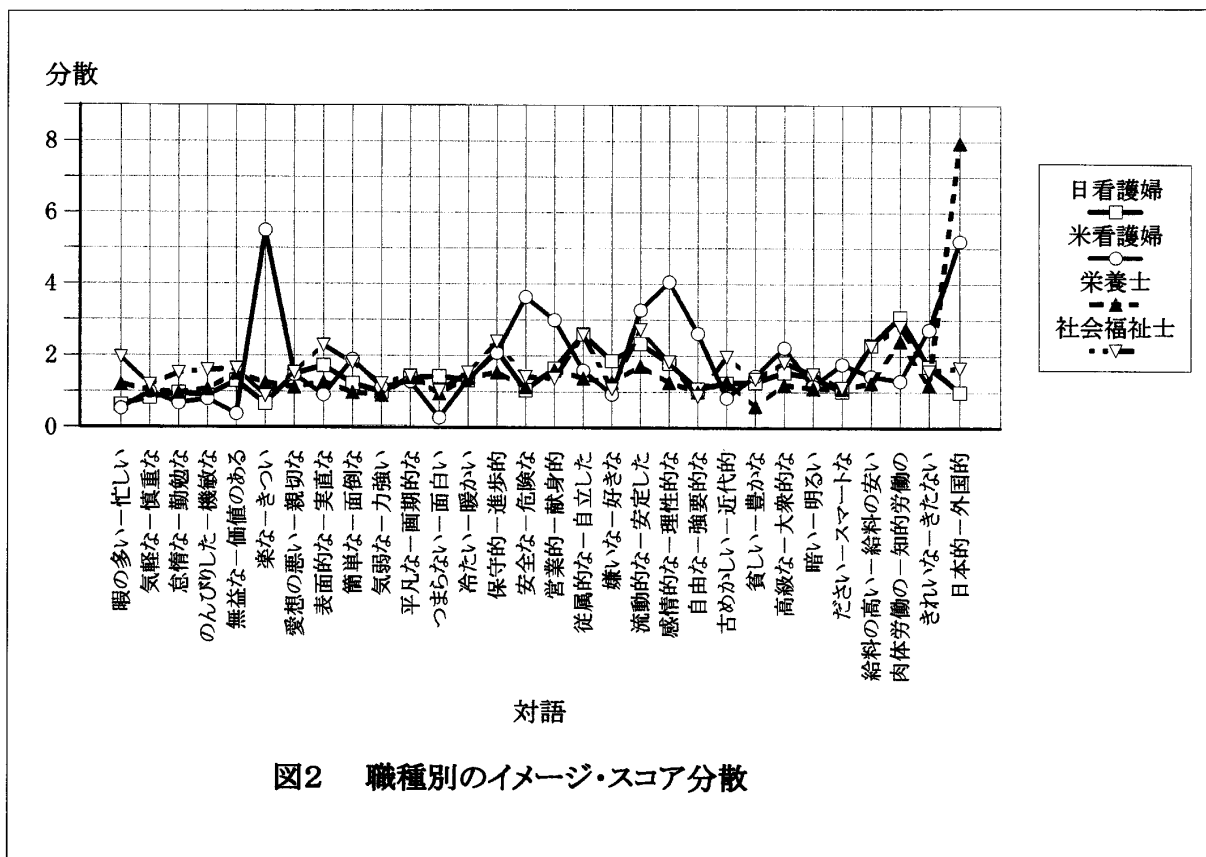


図2 職種別のイメージ・スコア分散

的(国際的)」と、米看護婦学生における「楽な—きつい」「感情的な—理性的な」「安全な—危険な」などの対語項目であり、わが国の3学生集団では「肉体労働の—知的労働の」がやや高く、「流動的な—安定した」は栄養士学生を除く3学生集団でやや高い。逆に「無益な—価値のある」「つまらない—面白い」などでは、米看護婦学生で極めて低いことが示された。

養成課程別学生集団のスコアの平均値をt検定により比較した。その結果をt統計量の出現確率の形で表3に示した。いずれかの2職種について、多数の対語項目で1%レベルで有意の差が認められたものの、日看護婦学生と社会福祉士学生間で17(1%レベル)あるいは10(5%レベル)、栄養士学生と社会福祉士学生間で19(1%レベル)あるいは15(5%レベル)の項目で有意差が示されず、この両場合以外の集団間ではスコア平均の差を示す項目が多いこ

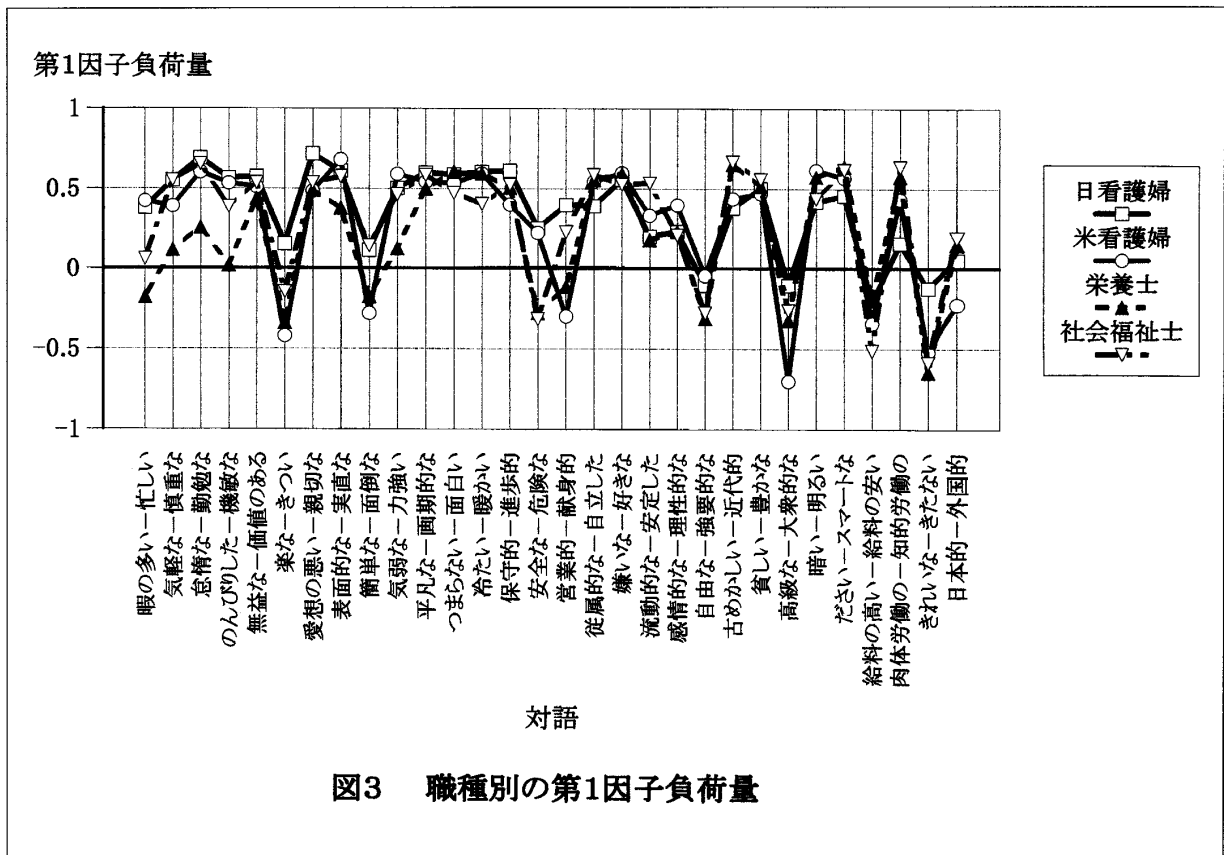
表3 各学生間におけるスコア平均の差より出現する t 確率

対語項目	集団比較	日看護婦— 米看護婦	日看護婦— 栄養士	日看護婦— 社会福祉士	米看護婦— 栄養士	米看護婦— 社会福祉士	栄養士— 社会福祉士
忙しい—暇の多い		0.022	0.000	0.000	0.000	0.000	0.481
慎重な—気軽な		0.620	0.000	0.000	0.000	0.000	0.380
勤勉な—怠惰な		0.000	0.000	0.029	0.000	0.000	0.345
機敏な—のんびりした		0.053	0.000	0.000	0.000	0.000	0.270
価値のある—無益な		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.299
楽な—きつい		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.012
親切な—愛想の悪い		0.000	0.000	0.054	0.000	0.000	0.032
実直な—表面的な		0.000	0.002	0.020	0.000	0.000	0.833
簡単な—面倒な		0.000	0.102	0.010	0.000	0.000	0.000
力強い—気弱な		0.115	0.000	0.000	0.000	0.000	0.722
画期的な—平凡な		0.000	0.000	0.212	0.000	0.000	0.000
面白い—つまらない		0.000	0.000	0.021	0.000	0.000	0.000
暖かい—冷たい		0.000	0.000	0.001	0.067	0.915	0.169
進歩的—保守的		0.000	0.000	0.098	0.000	0.000	0.046
危険な—安全な		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.907
営業的—献身的		0.000	0.000	0.055	0.000	0.000	0.023
自立した—従属的な		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.113
好きな—嫌いな		0.000	0.000	0.741	0.000	0.000	0.000
安定した—流動的な		0.000	0.032	0.019	0.000	0.000	0.000
理性的な—感情的な		0.001	0.193	0.586	0.018	0.003	0.147
強要的な—自由な		0.002	0.035	0.000	0.099	0.255	0.001
古めかしい—近代的		0.000	0.000	0.354	0.000	0.000	0.001
豊かな—貧しい		0.000	0.001	0.025	0.000	0.000	0.832
高級な—大衆的な		0.000	0.369	0.958	0.000	0.000	0.563
明るい—暗い		0.000	0.000	0.071	0.000	0.000	0.000
スマートな—ださい		0.000	0.000	0.739	0.000	0.000	0.000
給料の高い—給料の安い		0.000	0.294	0.263	0.000	0.000	0.655
知的労働の—肉体労働の		0.000	0.000	0.004	0.000	0.000	0.701
きれいな—きたない		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.509
日本的—外国的		0.392	0.000	0.020	0.000	0.402	0.000

(注) t 統計量の分散の算出はLeveneの検定により異なる。

とが示された。

次に因子分析による解析結果について述べる。4 集団のデータそのものは同じ項目を用いて同じ尺度・スコアで測定したものであるから、軸の回転等に関係なくそのままの因子負荷量で検討することとした。まず因子の変動寄与率について述べると、第3因子までの変動寄与率は、日看護学生で各19.6, 13.0, 5.7%, 米看護学生で各23.1, 9.2, 6.7%, 栄養士学生で各17.9, 15.3, 6.7%, 社会福祉士学生で各22.3, 12.8, 6.5%であった。いずれも第8, 9因子までとらないと変動の65%を説明できないのであるが、いずれも変動の約2割を占める代表的な因子として第1因子を考え、その負荷量から、それぞれの30変数による職イメージ因子の一部の構造を言及することはできる。図3に第1因子の変数別負荷量を示した。構造的にはいずれも似通ったものであることがわかる。相違は、栄養士学生・社会福祉士学生における「忙しい—暇の多い」項目、栄養士学生の「慎重な—気軽な」「勤勉な—怠惰な」「機敏な—のんびりした」項目、及び日看護学生の「きれいな—きたない」項目が0に近いこと、「危険な—安全な」の項目の看護婦学生とそれ以外との符号の逆転、などが特徴的である。第2因子以下の図



は示していないが、学生集団別にばらばらの構造を示した。

最後に対語そのものの関連性をみるために、対語項目スコアの全データにおける相関係数について示す（紙面の関係で表は省略）。相関係数そのものの統計的有意性は、サンプル数との関係から0.11程度（両側1%レベル）、あるいは0.14程度（両側0.1%レベル）の値で示されるため、多数の項目間で有意であるが、値そのものを重視する意味で高値を示した係数のみについて以下に列挙する。0.7以上の相関を示したのは「つまらない—面白い」と「嫌いな—好きな」間、0.6以上では「つまらない—面白い」と「暗い—明るい」間であった。0.5以上では、「気軽な—慎重な」、「のんびりした—機敏な」、「怠惰な—勤勉な」相互間、さらに「表面的な—実直な」と「怠惰な—勤勉な」および「愛想の悪い—親切な」間、「きれいな—きたない」と「肉体労働の—知的労働の」間、また「つまらない—面白い」と「平凡な—画期的な」間、「暗い—明るい」と「嫌いな—好きな」間の8つが高かった。

考 察

まず対語そのものに関してであるが、イメージを表す対語の翻訳という言語上の問題及びその受けとめ方（社会的意味）について考慮する必要があるものの、これに関してはネイティブ・スピーカーと打ち合わせた結果選択された語であり、一応妥当なものと考えている。また対

語間の相関関係で示されたように特に大きな値を示すものは少なく、採用したイメージ語として重複は少なかったと考えてよい。

結果として、まずスコア平均値の大きさからいえば、看護婦学生の方が職のイメージははっきりしていると考えてよい。なかでも米看護婦学生の方が職に対するイメージがさらに明瞭と考えられる。もちろん両国の学生の年齢の差という要素も検討しなければならない。しかし米学生間でのイメージがすべての対語の項目で共通するわけではないことは、仕事の「楽な—きつい」「国内的—国際的」、「感情的な—理性的な」、「安全な—危険な」のイメージ対語で、わが国学生をはるかに越えて分散が大きかったことから、一部そのイメージに混乱のあることが推測できる。これらは看護婦学生に特徴的かといえ、そうとはいえない研究結果がある。日米の一般学生が看護婦に対してもつイメージと、日米の看護婦学生が職に対してもつイメージを比べた研究では、それぞれ日米差のみが顕著に現れる結果となっており、養成課程学生と一般の学生がもつ差というより、それぞれの社会におけるその職のイメージの差が大きいという結果が示されている¹¹⁾。米看護婦学生を特徴づけるイメージのうち、わが国のイメージと逆転しているものは、「営業的」「古めかしい」「知的労働の」「きれいな」「給料の高い」「高級な」であり、米国での看護職の社会的ステータスの高さを象徴するものと考えられる。

日米ともに看護婦学生をより強く特徴づけるイメージでは、平均値の差から示される限りでは、「忙しい」「慎重な」「勤勉な」「機敏な」「価値のある」などが示された。日看護婦学生では特に「危険な」「きつい」「きたない」のいわゆる3Kのイメージが他より高く示され、看護職場の社会イメージのようになっていたことを追認する結果となったが、常識的に考えて医療施設が「きたない」はずがないし、労働も同じ施設内の医師と比べて格段に「きつい」はずもなく、夜勤のイメージが強く作用した結果であるかもしれない。恐らくこれらは作られたイメージをそのまま信じる結果であるとも推測される。

また米看護婦学生でわが国の学生より際だって高く示されたイメージ語では「面白い」「進歩的」「好きな」「自立した」「安定した」「明るい」「実直な」などがあり、養成課程学生には望ましいイメージづけと思われる語ばかりであり、わが国の養成課程教育の方向づけに参考とせざるをえない。

スコア分散の大きさで、集団間のイメージの非共通性が示されると考えられるが、米看護婦学生については既に述べたので議論を省略するが、栄養士学生の「日本的—外国的」の対語ではイメージづけが混乱することを示している。栄養士養成課程では職の歴史的な背景が教育内容中で抜けているのではないかと推測される。逆に分散が低く、平均値が高いことはイメージが定着したものと考えられるが、米看護婦学生の「価値のある」「面白い」イメージはこれらに該当する。わが国の学生のこれらのイメージは、一段と低いことから、養成課程教育の中でこれらのイメージづけを明瞭にできるような教育がまず望まれるであろう。創造性を視点とすれば必ずしも職のイメージが分極化することがまずいこととは言えないが¹²⁾、専門的な職業人

として養成される学生を受動的・観覧的にしないためには、養成教育の明確な動機づけ・方向づけは不可欠である¹³⁾。

因子分析では養成課程学生間にイメージの共通する2割程度の変動が存在することしか明らかにはされなかった。対語間で元々相関が低いため予想された結果ではあるが、不必要なイメージ語を淘汰する意味では同手法は有用である。

今後これらのイメージづけを養成教育の中で具体化し動機づけを可能とするような検討が必要であろう。

謝 辞

調査に際しては関係大学の教職員の方々にお世話を頂いた。また米国における調査に関しては、対語の日英比較から実施まで間接的ではあったが強力なサポートを頂き感謝の言葉もない。この場を借りて厚く謝意を表したい。

引用文献

- 1) 財団法人厚生統計協会編, 国民衛生の動向1998年, p. 91-94および p. 186-199, 財団法人厚生統計協会, 東京 (1998)
- 2) 財団法人厚生統計協会編, 国民福祉の動向1997年, p. 256-260, 財団法人厚生統計協会, 東京 (1997)
- 3) 松木悠紀雄・門脇千恵, 看護職の就業期間の分析—生命表分析からみた就業—, 厚生 の指標, 39 (6), p. 14-19 (1992)
- 4) 西川一廉, 職務満足の心理学的研究, p. 172-175, 勁草書房, 東京 (1984)
- 5) Hackman, R. J. and Oldam G. R., Development of the Job Diagnostic Survey, Journal of Applied Psychology, 60 (2), p. 159-170 (1975)
- 6) 愛媛県立医療技術短期大学学生委員会編, 本学卒業生・修了生の実態調査報告書, 愛媛県立医療技術短期大学, 愛媛県 (1993)
- 7) Osgood, C. E., The Nature and Measurement of Meaning, Psychological Bulletin, 49, p. 197-237 (1952)
- 8) 西田春彦・新睦人編著, 社会調査の理論と技法 (II), p. 151-180, 川島書店, 東京 (1976)
- 9) 田中靖政, コミュニケーションの科学, p. 206-242, 日本評論社, 東京 (1969)
- 10) 松木悠紀雄ほか, 学生生活の意識に関する調査研究—看護・社会福祉系女子大学生のもつ意識について—, 聖カタリナ女子大学人間文化研修所紀要, 2, p. 91-101 (1997)
- 11) 松木悠紀雄, 看護婦のイメージに関する日米比較, 民族衛生, 60 (6), p. 82-83 (1994)
- 12) エリッヒ・ヤンツ (芹沢高志・内田美恵訳), 自己組織化する宇宙, p. 553-575, 工作舎, 東京 (1986)
- 13) J.S. ブルーナー (鈴木祥蔵・佐藤三郎訳), 教育の過程, p. 89-104, 岩波書店, 東京 (1964)

(1998年9月10日受理)